学校現場から悲鳴が聞こえる

第１３回「統一した指導方針の下って何」

このシリーズのきっかけとなったことは、あまりにも教職員が多忙で、満足に教材研究（授業の準備）ができないという悲鳴に近い声を聞いたことでした。主に高校の実態を報告してきましたが、今回は３０代後半の先生に「教員生活において疑問や矛盾を感じたこと」をお聞きしました。

記者「難関といわれる教員採用試験に合格し、誰しも希望に胸を膨らませ、教壇に立ちます。先生もそうだったと思います。しかし、年数を重ねるうちにこんなことで良いのかと思うことも多々あるかと思います。当然のことですが、教員の仕事は授業だけではありません。非常勤の退職教員は『授業だけだと身体は楽だね。如何に現職はきついかよくわかる』と言いますが、部活動や進路の指導など教員になってみて初めて分かることもたくさんあります。職場では中堅にきているかと思いますが、どんな思いがありますか。」

学校は小さな社会
さまざまな先生がいて
さまざまな教育観がある

Ｑさん「私は、学校というのは生徒が社会に出る準備を行う場という一面があると思っています。様々な規則があり、様々な先生がいて、様々な生徒がいる。いわば小さな〝社会〟です。生徒はその中で規則を強制させられたり、自分の責任を果たす必要に迫られたり、自分の意見を主張したり、様々な他者の意見を聞いたりすることで、生きていく力を身につけていくのだろうと思います。

近年、学校側は「統一した指導方針の下」に生徒指導を進めようという傾向がより強くなってきているように思われます。もちろん学校として柱となる方針は必要ですし、同じ指導である方がより平等（？）で指導しやすい一面はあるとは思います。しかし、学校にいる先生全員が常に全く同じ指導を行う必要性はあるのでしょうか。最初に言いましたが、学校は小さな〝社会〟です。様々な先生がいて、様々な教育観を持ち、様々なスタイルがあるのが良いのではないでしょうか。最近の生徒を見ていて、生徒も画一化がだんだんと進んできているようにも思います。無難で大人しくて物わかりが良くて…良く言えば良い子、悪く言えば皆同じ。学校が画一化すれば生徒も画一化していくのかな？と思ったりします。」

記者「統一した指導方針という言葉はよく聞きますね。錦の御旗のように声高に言う先生もいます。状況にもよりますが、この言葉は思考停止につながる安易なこととも言えますね。随分と古い引用になりますが、１９４６年の５月、当時の文部省は『新教育方針』の中で〝学校の経営において、校長や二三の職員のひとり決めで事を運ばないこと、すべての職員がこれに参加して、自由に十分に意見を述べ協議した上で事を決めること、そして全職員がこの共同の決定にしたがい、各々の受け持つべき責任を進んで果たすこと、これが民主的なやり方である。このような学校経営そのものによって教師は民主的な修養を積むことになるのである。教員組合の健全な発達もまた教師の民主的な生活及び修養のために大切なことである〟と書いています。多様化した生徒には多様な指導があってもいいのですが、早く結論を求める風潮が画一化につながっているではないでしょうか。時間をか

けて論議するということができにくくなっているのは多忙化が一因でしょうか。」

Ｑさん「教師の多忙化は進んでいます。日々の授業、補習や課外授業、部活動指導をし、分掌業務を行い、数々の書類の処理に追われる…ちょっと数えるだけで本当に多岐にわたった仕事をこなしているのが現在の教師です。それこそ『何でも屋』です。私はあまり器用ではないので、多数の仕事が並行して進むとパンクしそうです。何でもやるかわりに、どれも中途半端になってしまいそうな気がしています。」

記者「先生の正直な言葉が今の多忙化の実態を改めて浮き彫りにしているかと思います。先生方の実態を少し出していただけますか。」

学校は時間外勤務で支えられている

Ｑさん「多くの先生方は朝早く出勤し、放課後遅くまで残って仕事をこなしています。教材研究や準備も立派な仕事であるにもかかわらず勤務時間外にせざるを得ない状況があります。最低賃金を大きく下回る手当で休日に部活動指導を行っている状況。誰かに分掌の仕事が集中してしまっていたり、目的のよく分からない書類やアンケート、調査の提出などなど。これまでの自分を振り返ってみても、進学校に居た頃は、毎日夜の１１時まで学校に残って授業や朝の課外、放課後の補習の準備をしていました。そして休日も補習や部活動をしていました。年休（有給休暇）はほとんど消化できていません。目の前に生徒がいるからそれが仕事だと言われればそうですし、個人的に好きでやっていることもあるかと思いますが、多くの先生方の時間外勤務によって支えられている学校教育であることをもっと分かって欲しいと思います。先生方の好意に甘えるだけなく、勤務時間の改善や手当など様々な面でより良い制度になっていくことを期待します。」

注：土日の部活動指導手当は、現在４時間程度以上で３，０００円となっています。朝６時頃に家を出て、試合等を行って帰宅が１９時になっても３，０００円です。時給にすれば２３０円です。

記者「現役時代を思い起こさせますね。こうした教職員の勤務実態について、全日本教職員組合（全教）では教職員の勤務条件改善として人事院や文部科学省等に要請行動を行っています。また『ゆきとどいた教育をすすめる教育全国署名』は毎年 1000 万以上の署名を集め、文部科学省に提出しています。地道なことですが、こうした運動と結びつきながら教育環境を変えていきたいものです。しかし、教職員の感情を逆なでするかのような人事評価が行われていますが、これについてどう思いますか。」

目に見える成果を要求する人事評価制度

Ｑさん「管理職からは客観的に目に見える成果を書くようにと言われていますが、学校教育において目に見えるものはごく僅かではないでしょうか。例えば進学実績、就職率、資格取得率、大会成績などがありますが、最終的な結果だけでなく、その過程における生徒の人間的成長や、何を学び身につけたかのほうがよっぽど重要な気がします。ましてや給与とのリンクがされようものなら分かりやすい結果ばかりを安易に求めてしまう風潮がより強まってしまうのではないかと危惧します。意欲向上どころか、学校の活性化を阻害することになりかねません。」

記者「教育の成果は直ぐに形となって現れるものではありませんので、先生の言うとおりです。数値目標だけが追求されたら教育は萎縮します。学校の内外からこうした状況に対して改善を求めていきたいものです。」